

### 第 3 回次世代を担う有機化学シンポジウム

|      |  |
|------|--|
| 開催報告 | <p>一昨年、日本薬学会化学系薬学部会が主催するシンポジウムの一つとして「次世代を担う有機化学シンポジウム」が発足した。第 3 回となる本シンポジウムは平成 17 年 5 月 20～21 日に日本薬学会長井記念館において開催し、若手研究者による 36 演題の新進気鋭な研究発表に対して活発な討論が繰り広げられた。以下、項目に分けてコメントする。</p> <p>【参加者数】参加者数は昨年の 257 名から 222 名に若干減少したものの、会場である長井記念ホールの大さを考えると適当な人数であり、発足以来毎回 200 名を越える多くの人々は本シンポジウムが定着したことを示唆している。参加者の内訳は、大学職員 39%、学生 40%、会社関係 19%、研究所・その他が 2%であり、学生のみならず大学職員・会社関係者共に若年層の参加が多いことが本シンポジウムの特徴となっている。これは、本シンポジウムの目的に合うものと考えている。</p> <p>【演題数】演題数は昨年の 26 演題から 36 演題に増え、薬学以外の理工系学部・大学院・研究所から 8 演題、企業から 2 演題の発表が行われた。有機化学をキーワードに間口の広いシンポジウムであるという本シンポジウムの主旨が、関係各分野に浸透し始めたことを示唆している。</p> <p>【演題の質】製薬企業や薬学以外の理工系学部・研究所からの演題が増えたことも加わり、生理活性物質の全合成研究や合成反応の開発研究にはじまり、プロセス化学、メディシナルケミストリー、機能性分子化学などの幅広い分野からの演題が発表された。</p> <p>【質疑応答】ディスカッション重視という本シンポジウムの特徴を踏まえ、発表時間 15 分、質疑応答時間 7 分と、質疑応答の時間を長くとった。過去 2 回のシンポジウムと同様、7 分間の質疑応答時間にも収まらない熱のこもった議論が続出した。</p> <p>【運営】演者自身によるコンピューターの操作によって、液晶プロジェクターを使った発表を行った。事前にファイルを送っていただき動作を確認したおかげで、コンピュータ・トラブルによる時間のロスが全くなく、スムーズな運営ができた。発表・質疑応答を含め各演題の講演時間を 22 分に設定したこと、午前 1 回午後 2 回各 15 分ずつ休憩を入れたことから、演題数の増加に伴いシンポジウム全体の開催時間が長くなった。演題数の制限、講演時間の短縮を含め、今後検討していく必要があると思われる。</p> |
| 討論主題 | 有機化学全般（天然物化学、医薬品化学、生物有機化学、有機物理化学等も含む）  |
| 日 時  | 平成 17 年 5 月 20 日（金） 21 日（土）  |
| 会 場  | 日本薬学会長井記念館（東京都渋谷区）   |
| 演題数  | 口頭発表 36 件  |
| 参加者数 | 一般 132 名、学生 90 名   |
| 実行委員 | 杉原 多公通（新潟薬科大学薬学部） 実行委員長<br>岩淵 好治（東北大学大学院薬学研究科）<br>椿 一典（京都大学化学研究所）<br>加藤 恵介（東邦大学薬学部）  |
| 世話人  | 飯田 剛彦（万有製薬）<br>伊藤 久央（東京薬科大学生命科学部）<br>内山 真伸（東京大学大学院薬学系研究科）<br>生頼 一彦（日産化学工業）<br>大嶋 孝志（大阪大学大学院基礎工学研究科）<br>大野 浩章（大阪大学大学院薬学研究科）<br>亀位 勝秀（第一サントリー生物医学研究所）<br>菊池 和也（東京大学大学院薬学系研究科）<br>北垣 伸治（金沢大学薬学部）<br>国嶋 崇隆（神戸学院大学薬学部）<br>栗林 健（三共）<br>近藤 和弘（名古屋市立大学大学院薬学研究科）<br>佐治木 弘尚（岐阜薬科大学）<br>佐藤 美洋（北海道大学大学院薬学研究科）<br>新藤 充（九州大学先端化学物質研究所）<br>鈴木 一郎（広島大学医学部総合薬学科）<br>砂塚 敏明（北里大学北里生命科学研究所）<br>高須 清誠（東北大学大学院薬学研究科）<br>高橋 秀依（帝京大学薬学部）<br>田中 正一（九州大学大学院薬学研究院）<br>田村 修（昭和薬科大学）<br>日置 英彰（徳島文理大学薬学部）<br>真木 俊英（長崎大学薬学部）<br>松永 浩文（熊本大学薬学部）<br>松谷 裕二（富山大学薬学部）<br>宮岡 宏明（東京薬科大学薬学部）<br>宮部 豪人（京都大学大学院薬学研究科）<br>好光 健彦（明治薬科大学）  |